
網

酒井 真言

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
網

【Nコード】
N51280

【作者名】
酒井 真言

【あらすじ】
ある日、巨大な網が地上に降ってくる。

吉田家の長男達也は、父邦彦、母紀子、妹春子の家族四人で高尾山に登っていた。五月の連休始めの行楽日和とあって、高尾の山は登山客に溢れていた。邦彦は身の引き締まった、いかにも健康そうな体つきをしていた。紀子は丸い体をしているわりに食が細く、逆に細身の邦彦のほうがよく食べた。達也と春子は母の体型と父の食欲を見事に受け継ぎ、欧米人を凌ぐ立派な肥満児であった。

家族は山頂へ続く表参道を迂回して、見晴らしの好い稲荷山を通る山道を選んだ。邦彦が（セツカク、山登リニ来タノダガラ）、文句をこぼす三人（ナンデ、ワザワザコンナツライ道ヲ……）をうながしたのだ。それが皮肉にも山道に渋滞を作る羽目になった。

おびただしい汗をまとった三人を前に歩かせ（ハア、ハア、ハア）、邦彦は胡散臭い励ましの声をかけて、士気を高めることに注意した（マサカ、コンナ事ニナルトハ！）。また同時に、気後れせぬよう必死に笑みを浮かべて、蟻のように続く後方の渋滞に目を向けて（コイツハヒドイ！ 皆サンニ悪イ事ヲシテシマッタナ）しきりに頭を下げた。何人かの年配の人は笑いもしていたが（ハハハ、サゾカシ辛イダロウニ）、多くの人々は無関心な顔して（アンナクソデブ、山ニ登リニ来ルナ！）黙々と歩いていた（道ヲ踏ミ外シテ、落ちテシマエバイイノニ）。

渋滞に巻き込まれ人々は存分に新緑を味わうことになったものの、吉田家はそれどころではない。肥満の三人は頭が朦朧として（ハア、ハア、ハア）、ボールペンの先端ほども周囲に気が向かない。生死の境を彷徨っている。そんな三人を見て邦彦は同情と後悔を覚え（

カワイソウニ、俺ガコンナ道ヲ選ンダバカリニ)、また恥らしさを打ち殺し(アア、愛スベキ家族ナガラ、ナンテ愚鈍ナノダロウ!)、平時の勤め先よりも忙しく気を配った。

困っている人に手を差し伸べる人間もいれば、追い打ちをかけるのもまた同じ人間である。邦彦のうしろを歩く、年金を受給しているであろう老人男性は「ほれ、もうそろそろ山頂じゃ! もうひとつん張りじゃぞ! がんばれ!」陽気に声をかけてくれる(最近ノ若者ハ軟弱ダ!)。心強い味方に邦彦は随分と励まされる(アア、重荷ヲ一緒ニ背負ツテケレル、ナンテ親切ナ老人ダロウ!)。春子は振り返りもせず(ウルサイクソ爺ダ)、のろのろと歩みを進める。

またその老人のうしろを歩く幼稚園児らしき男の子が「お母さん、なんであんなクソデブが山に来るの? 自分の体がわからないのかな? 脳に脂肪がついて鈍くなったんだろ?」無邪気な質問をする。母親は「しっ! 静かにしてなさい」男の子の口に手を当てて(コノ子ノ言ウ通りダワ)、邦彦に申し訳なさそうに頭を下げる(ホント、何デ山ナンカニ来ルノカシラ)。

それでもどうにか山頂へ辿り着いた。すると幾人かの人から賛辞をもらい、周囲の人々から不気味な注目を集めてしまった。邦彦は人々からの賛辞に厚く感謝して(人情アル人ハ、必ズイルモノダ。ダカラコソ頑張ツタカイガアル)、「純粹な頑張りは素晴らしい! 三人とも好く登りきった」三人にねぎらいの言葉をかけて喜んだ。三人は笑みを浮かべるも(ハア、ハア、ハア)、それとなく決まり悪そうだった。

山頂は人々でごった返し、吉田家は居所を得るのに苦労した。邦彦が楓の木の傍にレジャーマットを敷いて、待ちかねていた吉田家得意の食事を始めた。

そんな五月初旬の休日を楽しむ、人々溢れる、うら若い緑賑わう高尾山が始まりだった。

登山に費やした脂肪をわずかに取り戻して、見晴らし台から丹沢山塊の方角を達也が眺めていると、上空から突然巨大な網が降ってきた。丸い円を描く網裾には沈子おもりがついており、轟音を響かせて山の斜面にへばりついた。市民球場ほどの大きさがあり、網の目は茶色く細かい。

山頂は騒然とした。達也はただ驚くばかりだった（エエエ！ ナンダヨアレ！）。降ってきた網を見ようと人々が見晴台に集まり、誰もがカメラと携帯電話を向けている。網についての根拠のない憶測が飛び交い、様々な媒体を通して情報は瞬時に共有されるが、誰一人真実を知る者はいなかった。

最前の位置に居合わせた達也の丸い体に、うしろから人々の重み加わる。鈍感な達也はまるで気にせず、網に目を向けて離さない（何カノ事故力？）。

網からは人間の叫び声がかすかに聞こえ、耳にしたことのないその声は、曇りなき恐怖だとはつきりと達也に伝わった。ドラマや映画では決して味わうことのない、日本の日常から葬りさられた純然たる恐怖が、山頂の人々の興味をさらに駆り立てた。網は図々しく山頂にへばりついたままだ。

網が奇妙に動き出した。糸で手繰り寄せられるように、芋虫の這うような一定のリズムを保ったまま、ゆっくりと宙に吊り上げられていく。網を吊り上げる道具など一切見られない。原因のつかめない動きに、山頂がうるさく騒ぎだす。網からの悲鳴が激しさを増す。

達也は目を見開くだけだった（ワアア、ナンダヨアノ動き！）。

無分別な力によって吊り上げられた網は、底面の盛りあがった円錐形のまま宙を登っていく。底には無残に剥ぎ取られた木々が絡みつき、ぼたぼたと土と木を地に垂らしている。人間の悲鳴は二分されて、地上と網からもたらされる。山頂にさらなる恐怖が蔓延した。

山の斜面は丸い円の形に荒れ果て、緑がまばらに残っている。至極単純であり、かつ圧倒的な破壊力である。視力の良い達也は、網からこぼれた中年女性の小石のような体が、地に向かって落ちていく光景をはつきりと見た（ウワアア！ 落ちタ！）。達也はひどくぞっとした。「人が落ちたぞ！」周囲から手柄を取ったかのような大きな雄叫びがした。

網が空へ段々と小さくなる。山頂からの視点は空一点に集中される。網は拳ほどの大きさになると、動きが止まった。山頂がどよめいた。

五分もするとまた網が動き出した。量は少なくなったものの、網目からこぼれ落ちる木々は止むことなく高尾山に降ってくる。

親指ほどの大きさになった頃、網が突然姿を消した。行方を見つめていた山頂から、未知な物にありがちな結末に対して、失望の聲がすこしばかり起こる。達也もやはり、ちよつとばかりしまらなさを覚えた（アアア、消エチャッタヨ）。

山頂に土砂降りの雨のごとく、人々は麓へ勢いよく流れ始める。達也が家族と落ち合うと、紀子と春子はめそめそ泣いていた。邦彦はそんな二人の肩に手をかけて（アンナ恐ロシイ光景ヲ見タンダ、カワイソウニ）、陽気な顔を浮かべている。

「急いで山を降りたところで、どうなるものでもない。わたし達は落ち着いてから降りることにしよう。せっかく高尾山に来たのだから、帰りぐらいは休日らしく、のんびりと帰ろうじゃないか」

そんな邦彦の言葉を聞いて、達也は思わぬ安心を得た（父サンハ、ヤケニ呑気だな）。

行方不明者三十八名・死亡者十三名・重軽傷者五十二名を出した高尾の網は、その日の夕方には全世界に知れ渡り、連日メディアを中心に人々の話題を占めることになった。網が引き上げられる様子は無数の動画に変わり、人の落ちる残酷な映像はインターネットに繰り返し返され、丸くくぼんだ山の斜面は衛星写真の地図によって、人々の間で実際に確認された。

網の存在について様々な推測がのぼった。隕石・地球外生命体・テロリスト・巨大企業の実験・社会主義国家の拉致専用秘密兵器・ストライキ・神からの天罰・宇宙人の落し物、など等、もつともらしく思える事から、実にくだらない事まで噂された。

網を潜くって生き延びたという安田敏子なる中年女性が、連日メディアに露出しては、大学の弁論サークル時代に磨きたいびつな話術を用いて、「網がわたしの頭上に降ってきて、宙に持ち上げられた時は、もう、それは、ほんとだめだと思いましたわ。んふ、んふ、けど、わたしの夫が、あの、優しく、男らしくて、自分の身をかわりみない夫が、たくましい夫が、動けないでいるわたしの体を必死に網の外へ追い出してくれました。夫の両足には蔓がからまり、あらゆる角度に曲がっているのです。ああ、夫は誰よりもわたしを愛してくれて、優しく、優しく、それはとても立派な方でした！」人

々の注目を大いに集めた。肌の黒い油染みた芸能人は香具師らしく番組を煽りたて、婚期の過ぎた女性芸能人の束からぼろぼろ涙を流させた。

さらに気の早い者達が、特番製作・映画製作・関連本の出版・小説の題材・高尾の名産品製作・観光者の誘致、など等を競って働いた。しまいには“網ちゃん”なる高尾山のマスコットキャラクターを考え出した不届き者も現れ、続いて“高網君”なる雄々しいキャラクターも別の人間から生まれた。普遍化を競ってマスコットキャラクター同士激しい争いをした。

また科学者連は高尾の網を、純粋な興味を持って解明しようとした。網の構造は驚く程単純であり、また一切説明できない点もあった。底面の直径が百三十メートル、高さが三百メートルの巨大な円錐形の本目網は、地球上には存在しない大きさの麻で編まれた投網あみだった。網は漁に使う投網とまったく同じ形状である。網が宙に吊り上がる動きも、人間が網を地上で手繰り寄せるのとはぼ変わらず、とてつもなく大きな巨人の動きによって可能だと説明した。とても機械で吊り上げるような動きではなく、一時停止したのも、手繰り寄せている存在が、疲れて休んでいたからだの説明するのが妥当だった。

ところが手繰り寄せる際に使うはずの縄が存在しない。縄に引張られた動きのくせに、肝心の縄が見えない。これがどうにも説明できない。さらに上空で突然姿を消したのも、まるでわからない。とにかく原始的な作りの投網を使って、巨大な何者かが地球上の生物を捕獲したと科学者連は結論した。実際分析するまでもなく、網は物を捕らえるために作られた物であり、今回の出来事はただの投網漁としか思えなかった。

連休が明けて達也は高校に登校した。生徒は皆ブレザーを脱ぎ、セーターやカーディガンを着て通学路を歩いている中、達也一人半袖のシャツを着ていた。

蛍光灯の点いていない朝の教室では、ところどころに固まったそれぞれのグループが、高尾の網について話していた。七人ほどで囲う男女のグループの一人は、後頭部の突き出た頭を働かせて、友達の友達の親戚の父親が網にさらわれたと、鼻腔を広げて得意そうに話している（マア、実際二会ツタ事ネエケド）。達也は耳をそばだてながら（ヘエ、ソウナンド）、一番後方の窓際の席に着いた。

机の上をうつすらとした埃が覆っている。すぐに小柄な男子生徒が達也に近寄り（ウワツ！ 朝カラ臭ツテルヨ）、目の前の席に座った。

「おっす！ 達ちゃん、夏を先どりかい？」

長嶋信夫というこの男子生徒は窓にもたれかかり、イスの背もたれに腕をかけて間の抜けた微笑みを浮かべ（達チャン、コノ時期二薄手ノ半袖一枚ハ、有リエネエヨ）、脂の浮いた達也の顔を見る。

「おはよう信夫。夏も何も、暑いんだよ」

達也も笑って信夫に返事をした（涼シイ顔シヤガツテ、太ツタ人ノ気持チガワカルモンカ）。

「玉置がよ、さつきから女子の前で網について話してさ、調子づいてんだよ。あの法螺吹き野郎、またありもしないこと言って、女子からの人気を得ようとしてるんだぜ。なんで女子は法螺吹きが好きなんだろうな、不思議だよ」

「なんだか、知り合いの父親が網にさらわれたんだってな」達也はカバンから教科書を出して（サツキノ八嘘力）、机の中に入れる。

「なんで達ちゃんが知ってたんだよ」信夫の目はかすかに大きくなる。

「教室入った時に聞こえたんだよ」次にナイロン製の黒い筆箱を入れる。

「あれ、ぜってー嘘だぜ」信夫が達也の机の上に毛の薄い腕をかける。

「どっちだっていいじゃんか」達也はティッシュを取り出すと（ダ イブ埃ガ溜マツタナ）、丁寧に折りたたむ。

「よくねえって、嘘ついて女子の人気を得ようなんて、ずりーよ」信夫は口を尖らせて話す。

「別にいいじゃん、しゃべったもん勝ちだろ」達也は机の上を拭く（ソナニヒガムナヨ）。

「それよりもさ、達ちゃんのブログ見たぜ。目の前で網を見たんだろ？ どう？ やっぱりすげー？」信夫は体を前に出して、達也の顔を覗き込む（アツ、ソウダ！）。

「ああ」達也は信夫の顔を見ない。

「おい、木塚！ 達ちゃんが網を実際に見たんだってよ！」

信夫が玉置のグループにいる女子生徒に声をかけると、前髪の揃った木塚は達也に顔を向けて、「ええ、本当なの？」高い調子の声を出す（フッフ、達チャンガ？）。

達也が苦笑いを浮かべると（モウ、信夫ノ奴メ）、一段と汗をかいた。

六月に入る頃には、世界各地に投網が降りはじめていた。山岳地帯や砂漠地帯、また地方の田舎に降ることが多く、いまだ都心部に降ることはなかったが、それでも被害は相当なものであった。投網の材質と形状はどれも似ていたが、吊り上げられる動きの速さはどれもまちまちだった。

なかでも中央アジアで確認された投網は変わっていた。木綿で編まれたその投網は他の物に比べて二まわり程小さく、赤く染色されていて、地表に張り付くと間を置かず吊り上げられた。サイズに見合わない機敏な動きをして、何度もゴビ砂漠に降っては容赦なく地表の物を吸い上げた。“赤網”という見たまんまの名前をつけられて、中央アジアの人々に恐れられた。

また“青網”という名前の通りの投網がアフリカに現れた。赤網とは逆の性質を持ち、三倍の大きさを持っていた。動きがとろいだけならまだしも、吊り上げられている最中に、突然地上に落下することが何度もあった。はるか上空から重力を得た網は地上に叩きつけられ、巨大な水滴のごとく爆ぜて地上を揺るがした。捕らわれていた物は粉々に砕けてしまい、無残な塊に混一されてから再び宙に

吊り上げられた。北アフリカのオアシスの一つがまるまる捕らえられ、砕かれ、たわいもなく消滅させられた。

網による行方不明者が十万人を突破した。人間は投網対策を練り、吊り上げられる前に網の上部を切断、あるいは破壊することを考えた。ところが全ての投網の動きが学習したように素早くなり、地上に降るとすぐに吊り上げられるようになった。ましてや突然降ってくる網の予測がつかず、対処する前に上空へ吊り上げられてしまい、切り離せば地上に叩きつけられるだけであつた。地球の資源を助けることはできたが、生物の命は助けることができなかった。

世界中が投網に動揺する中、イランの首都テヘランにある出来事が起きた。三週目の休日の午前中、空からオリーブほどの金の粒が降り始めた。通り雨のように狭い区域内に集中して降ると、激しい金の飛礫つぶては十五分ほどで止んだ。情報はインターネットサイトのつぶやきを介して瞬時に世界中へ伝播し、多くの人間が狂喜して金を求めて集まつた。

すると金の粒が降りだしてから三十分後、網が空からぬつと現れて、金をかき集める人々をさらいだした。投網とは違った柄つきの丸い網は、建物を気にすることなく無造作に地表をすくうと、すつと上空へ引つ込んで消えてしまった。とてもあっさりした網だつたが、なにしろ数があつた。直径二百メートルほどの玉網たまが八本もあり、消えてはまたすくいに、何度もあらわれた。被害は甚大なもので、テヘラン中心部の繁華街は瞬く間に壊滅した。

射的部の練習を終えて達也が家に帰ると、夕食の用意が整う手前だった。達也はタンクトップと短パンの部屋着に着替えてから、居間の中心に据えられたテーブルに着いた。邦彦が氣勢をあげて「入ったか？ 入ったか？」プロ野球中継に食い入っている前に、娘の春子がサラダ菜に囲われた大量の鶏の唐揚げと、ベーコンとジャガイモのバター炒めを置く（オ父サンツタラ、手伝ツテクレバイイノニ）。続いて紀子がスパゲティーサラダとチンジャオロース、お煮しめを置く。どの料理もこんもりと盛られている。達也は座ったまま、テーブルの上に目を向ける（ウマソウナ唐揚げダ）。

テレビの電源を消して、四人揃っていたいただきますをすると、紀子以外の三人はまず唐揚げに箸を伸ばした。

「佐々木さんの通夜があるから、明日は夕飯いらないよ」邦彦が紀子に話しかける。

「あらそうなの、明日はハンバーグにしようと思ったのに」紀子は唐揚げをサラダ菜で巻いて、箸でつまむ。

「おれの分は子供に食べさせてやってくれ」邦彦が口を動かしながら器用に話す（ソウカ、ハンバーグダツタカ）。

「ええ、そうするわ」紀子も同様料理を味わいながら返事する。

「いいなお父さん、お寿司食べれるんだ」ニキビ面に笑みを浮かべて春子が話す。

「食べられることは食べられるが、体面があるから満足に食べられないよ。逆につらいもんさ」邦彦がジャガイモをつまむ。

「ええ？ いいじゃないかまわす食べれば、わたしだったら気にせず食べるよ」春子の話す口に、唾液とからまる唐揚げが覗ける。

「そももいかないさ、春子ぐらいの年齢と体ならみんな納得するが、おれのような痩せた中年男じゃみつともない」邦彦が箸を持っていない手を横に振る。

「ええ、みつともないわ」チンジャオロースをつかんだ紀子も同意する。

「大人は大変！」春子がまた唐揚げに手を伸ばす（ウフ、美味シイ！）。

「そもそも、食べる目的で通夜に行くんじゃないんだぞ。達也、ほら、おまえの中学の同級生に和夫君っていただろ？」邦彦は箸を止めた。

「和夫君って、野球部にいた佐々木和夫のこと？」達也はスパゲティーサラダに目を向けて話す。

「そうだ、その佐々木和夫君の、父親のお兄さんがな、網の沈子にぶつかって亡くなったんだよ。ついてないよな」邦彦は痛ましい顔をして首を傾げる。

「その人が、父さんとどう関係があるの？」スパゲティーを口に入れるまでに、達也はテーブルに三本こぼす。

「その人はおれの会社の部下でな、食料品の在庫管理を主任していたんだよ。神経質なぐらい細かいところにも目が行き届いて、仕事に對してとても真面目な人だった。まったく、惜しい人を亡くしたよ」邦彦は再び箸を動かす（イヤ、仕事ノ話ハヨソウ）。

「網って、富士の裾野に降った一昨日の網のことかしら？」紀子は怯えた顔つきをしている。

「ああそうだ。なんでも夫婦でツーリングしている最中に、いきなり降ってきた沈子が前方の道路をふさいでしまい、避けきれなかったらしい。正面衝突だったさ。近頃は網がよく降るから、ほんとにたまったもんじゃない」そう言って邦彦が三人の顔を見ると、返事もせずに黙々と食べている。

「それにしても今日のテヘランの出来事はひどいものだ、まるで人間を弄んでいるかのような有様じゃないか、なあ。おまえたち、空から金が降ってきたら、出来るだけ遠くに逃げるんだぞ」邦彦は米を口に入れる。

「あんなの、金にいやしい人しかひっかからないよ」春子はまた唐揚げに食いつく（ウッフ、ホント美味シイ唐揚げネ）。

「いいや、わからないぞ。金の代わりに寿司が降ってきたら、春子なんか大きく口を開けて、空を見上げかねないからな」

邦彦がおどけて話すと、吉田家の食卓に明るい笑い声が響いた。

投網と玉網の被害が世界各地に相次ぎ、行方不明者が五百万人を

越えた。網の降る場所は徐々に集中化され、中央アジアから北アフリカにかけての被害が特に大きく、行方不明者の半数以上を占めていた。そればかりでなく、網の素材がいつの間麻からポリエチレンに変わり、吊り上げられる速度が今までの三倍に増し、且つベルトコンベアーのような一定の動きに変化した。青網も落下することがなくなっていた。

七月になってさらに異変が起きた。朝方、エチオピアのアデイス・アベバの住人の一人が、突然恐ろしい速さで宙に釣り上げられた。路地裏のゴミの吹き溜まりに金塊が落ちているのを見つけて、住人が近づいて触れてみたところ、掛け針がわつと金塊から突き出て横っ腹に突き刺さり、“く”の字のまま無理やり体を持っていかれた。

ムンバイでは、通勤ラッシュに混雑する列車が出発する直前、等間隔に並んだ巨大な掛け針が空から降ってきて、窓枠や降車口に引っ掛かり、窮屈な車両をそのまま宙に持ち上げてしまうと、血を流すようにぼとぼと人間をこぼしながら上空へ消えてしまった。垂れた滴によって、駅には大きな血痕が点在していた。

ブエノスアイレスにおいては、先端に鉤かぎのついた巨大な棒が現れて、商社の詰まった高層ビルを崩れないようにうまく引き剥がすと、図々しくビルごとさらってしまった。

そうかと思えば、休日の東京渋谷の青山通り、買い物するためを訪れていた羽根木に住む男子高校生が、恋人と手をつないで交差点を渡っているところ、突然巨大な銚もりが斜めに降ってきた。街灯ほどの大きさの銚は先端が三叉に分かれていて、容赦なく男女の体を貫通してアスファルトに突き刺さった。その姿は突き刺すよりも、押し潰すというべきである。周囲が騒然と悲鳴をあげるなか、ピクリとも動かない潰れた二人のつがいは、インドの列車同様に血を垂ら

しながら銚共々上空へ消えた。

無残な男女は達也のクラスメイトである、玉置と木塚の二人であった。

蒸し暑い小雨が降るその日、学校では犠牲になった若い二人に黙祷がささげられた。達也は身近なクラスメイトが亡くなった悲しみよりも、理不尽に命が尽きる現世の実際の例を身近に感じて、ただ恐れ慄く^{おの}だけだった（アア、突然死ンデシマウンテ！）。

それでも日常は二人の死をわけもなく吸い込み、平凡に回り始める。達也は試合の近くなった射的部の練習を終えると、信夫と一緒に三軒茶屋駅からすこし離れたファミリーレストランに寄った。母紀子には「試験勉強をするから夕食はいらない」その旨を伝えてあり、しつかり食事代をもらっていた。

三人前と信夫の食べ残しを達也がけろりと平らげると（レストランノ料理モウマイナ）、喉元^{たん}に痰のかかる甘い飲料水をこきゅこきゅと三杯吸いこみ（プハ、ウマイ）、季節の果物を使ったパフェを注文する（グヒ、マンゴーパフェカ）。栄養が効率よく吸収されない痩せの大食いと違って、達也は見た目通り、飾りよのない大食漢だった。

信夫は何度も「達ちゃんがいるから、世の中には食えない子がたくさんいるんだぜ？」あげ足をとる。達也はまるで気にかげず（オレノ食欲ハ、オレガ一番知ツテイル）、手の平でなできるようにパフェを食べ終わる。

「木塚も悲惨だよな、玉置と一緒にいたばかりに死んじまうんだから」信夫は嘲^{あざわら}るように声を出す。

「二人ともかわいそうだけど、残された両親は特につらいだろうな、あんな映像がネットで流れて」達也が茶をすすする。

「達ちゃん、あの槍はきつと、昔のアニメに出てきたグングニルの槍だぜ。もう世界は終焉に向かっていているんだよ」テーブルに肘をつけて信夫が話す。

「ほんと恐ろしい世の中だよ」達也はため息をつく。

「そろそろでけえロボットが現れて、網を退治してくれるとおれは踏んでいる。蛍光の黄緑やら、水色やら、ピンク色のロボットがな」信夫が人差し指を立てて話す。

「そうだといいんだけどね」達也はさらにため息をつく。

「空から降ってくる網に人間がおびやかされるなんて、いったい誰が考えた？ 映画やアニメじゃ、見たこともない兵器や体を持つ、強力な宇宙人が侵略するのに、現実ではただの巨大な網だぜ？ それも人間が作った物がただでかくなっただけだろ？ 宇宙人に技術を泥棒されて、ただ捕食されたまま人間が減びるわけがねえ、必ず宇宙人に立ち向かうんだ！」

信夫はメロン味の炭酸飲料水を口につける。

「ほんとねえ」達也も茶をすすする。

「わたし、長島信夫私立高校二年生は、人類に仇なす網を倒すべく、超科学生命体ロボットのパイロットとして、跳びます！」信夫が真面目な顔して敬礼をする。

「ほんとお願ひするよ」達也はカバンに手をやる（ソロソロ勉強始メナイト）。

「なんだそれ？ 達ちゃんもやれよ！ 『わたし、巨漢兵吉田達也は、激烈なる胃袋でもって網と対峙し、旺盛な食欲をもって網を貪り、我ら人類に貢献します！ ラーメン！』って、こんな具合によ」
信夫は立ち上がり、両手で自分のわき腹をつかんで揺すっている。

「ふん！ 馬鹿らしい！」達也は信夫の顔を見ずに（何が激烈な胃袋ダ！）、テーブルの上へ勉強道具を出した。

「無駄、無駄、馬鹿は達ちゃんだって、勉強したところで、試験が来る前に網が来るかもしれないんだぜ？」信夫は席に座って口に氷を含む。

「試験が来たらどうするんだよ？」達也は英語の教科書に目をやる。

「『先生、網が怖くて勉強できませんでした。どうも自律神経がおちつかなくて、睡眠薬を飲んでも眠れず、勉強に集中できません。手もぶるぶる震えます』って言うさ、そうすりゃ先生もつるさいこと言えないだろ？」信夫が氷を野蛮にかじる。

猿知恵を吐露する信夫の顔を見た達也は、口をつぐんで教科書を開いた。

針・鉤・鋸の小物らも降るようになり、世界はさらに混乱を極めていく。人類は対策を練るも、実行に移すべく為に必要な製造施設が、準備する間もなく網に破壊されてしまった。

インフラ設備もじわりじわり磨り減り、修復する設備および人員も作業中に網に攫さらわれてしまい、人類の回復機能は網による乱獲に追いつかず、またその回復機能も損なわれていった。人類の首脳である選ばれた人間達は地下に身を隠し、連絡を通じ合って対策を講じるが、実際の実行力に欠いていた。

八月になると、追い打ちをかけるさらなる三つの網が現れた。

ある日の夕方、ロンドン、ヒースロー空港を飛び立った旅客機がロサンゼルスへ向かうところ、大西洋上空で突然網にぶつかつた。衝撃を吸収するその網は非常に柔らかく、機体を損傷することなくゆっくりと受け止めて、頭と羽に網目を絡ませた。それを皮切りに大西洋を渡る航空機が次々と網にからまつた。どういう原理かわからないが、巨大な浮子アバが横へ線になつて上空に連なり、その下には波立ちの少ないオーロラのごとく、透明がかつた白色の網が揺れていた。網はアイスランド近辺から緯度に沿って走り、その長さは約九千キロにも及び、悠々と大西洋上で待ち構えていた。とつてもない規模の刺網だつた。

また同じ日の深夜、スペインのアンダルシア地方にとつともなく巨大な網が降ると、強大な地震を起こしてスペインのほとんどの建物を足元から崩し去つた。地震は地球の裏に届かんばかりの規模だつた。幅二百キロはあるう巨大な網は東へ向かつて移動を始めると、アルプスをものともせず乗り越えた。フランス、スイス、チェコ、ポーランドを飲み込んで進むと、モスクワを飲み込んで空高く消えた。ヨーロッパ上には夜のうちに極太の線が一本引かれて、地表がまるまる禿げてしまった。それは底引網に引きずられた跡だつた。

それと同じくして、巨大な浮子が北アメリカ東海岸のはるか上空無数に浮かんで円を描いていた。円の直径は千キロに及んだ。明け

方になり、浮子の下に網が突然姿を現すと、ゆつくりと円が縮まり、内に押し寄せて、ニューヨークを飲み込んでから上空へ消えた。とつともなく巨大なまき網が、北アメリカの大地に圧倒的な円を印した。

一夜にして膨大な量の物 生物・機械・建物・資源 が地球から奪い去られた。馬鹿々々しいほど単純な網の物量に、人類ははつきりと絶望を実感した。行方不明者は一億を軽く突破した。

太陽燦々（さんさん）とする真夏の午後、吉田家は芝のきらめく自宅の庭にて、バーベキューをしていた。清涼感溢れるパラソルの下、網の上の食材が無駄にならないよう邦彦は注意を注ぎ（焼きスギナイヨウニシナイトナ）、その周りを家族が囲んで眺めていた。邦彦の黒々とした顔は輝く笑顔を浮かべていたが（イヤー、ホント、暑い！）、三人は魂の抜けたような顔をしていた。邦彦一人が元気だった。

「このフランクフルトなんか、そろそろ食べられるぞ」

邦彦がトングを使ってフランクフルトをひっくり返すと、無言で達也が手を伸ばす（ハア……）。春子も手に取る（ハア……）。

「玉ねぎとピーマンも焼けてきたぞ、ほらほら」邦彦が野菜をいじくる。紀子は青ざめた顔して皿に載せる。

「それにしても豪華な食材だ。今日は母さんのファインプレーが利いているな」頬に汗を伝わらせて、邦彦が笑いながら紀子の顔に目をやる。

「そうですね」紀子は歪んだ笑いを浮かべて（ハア……）、ひきつった声を出す。

「なあ、そうだろう、そう思わないか？」

邦彦が二人の子供に目を向けるも、二人は目を伏せたまま静かに

頷くだけである。邦彦は気にせず（コイツ八困ツタナ）、網の上に横たわる海老をひっくり返す。

「おっ、海老もいけるぞ。ぷりぷりぷりの海老もいけるぞ」邦彦が声を出すと、気の沈んだ三人は従うように海老を皿に運ぶ。

「こうして家族全員でおいしい食卓を囲うのも、いつ最後になるかわからないからな、ほらほら、イカも好い具合にいかしてるぞ」邦彦がイカをつまんで子供達の皿に乗せると、紀子と春子が涙を流し始める。

「おいおい、二人とも何泣いているんだ。いいかい、泣いてちゃ食べ物もちゃんと味わえないぞ。なあ、達也」邦彦は変わらず笑顔を浮かべている。

「父さんは元気だね」達也がぼそつと言う。

「あたりまえだ、一家の主に元気がなくて、家族が明るく過ごせるか？ おれは馬鹿だが、元気だけは誰にも負けないぞ！ ほら達也、せっかく母さんが食料を貯めこんでくれたんだから、どんどん食べ！ 人間、物を食べれば元気になるぞ」

邦彦はとうもろこしをひっくり返す。紀子はさらに涙を流す（ウウウ……）。

「父さん、偉そうにしてないで、カルビ焼いてよ」とうもろこしをつかんで達也は言う。

「おお、悪い悪い、肉が足りなかったな」邦彦は赤い厚切りの肉を網の隙間に並べる（ヨシ、タクサン焼イテヤルカラナ）。

「でも、父さん、なんでうちの家はこんなに食材が残っているの？
世間じゃ食糧不足がひどいって騒いでるのに……、父さんの会社
から持ってきたの？」

達也が妙に口を動かしながら言う。

「違うぞ、母さんがお前達のためを思って、大型の食料品店で大量
に買い込んで、冷凍しておいてくれたからだ。父さんの会社なんか、
輸入がとつくにストップして、外から食材なんか入ってきやしない。
日本の網被害は少ないが、他国はすでにぼろぼろで、輸送経路が壊
滅しているんだ。日本もじきに網に襲われるだろうが、襲われなく
ても、食料自給率の低いこの国じゃ多くの国民を養いきれず、食べ
物がなくなつてひどい有様になるだろう」

邦彦は一度紀子の顔を見て（オマエハ立派ナ母親ダ）、笑いなが
ら子供達に話す。

「わたし死ぬのもイヤだけど、食べられないのはもつとイヤ！」春
子が大声をあげて泣き出す（アアン！）。

「じゃあ父さん、バーベキューなんかしないで、少しずつ食べてい
けばいいじゃん。バーベキューなんかしたら、煙の匂いで食料があ
ることばれるよ」達也が箸を止める（会社ガ潰レタカラ、頭ガ働カ
ナインダ！）。

「ああ、もちろん達也の言うとおりで、けどな、こそこそと隠れて
食いつないでも、食料がなくなる前に網に襲われちゃ、元も子もな
いからな。それなら、いつそのこと食料を早めに使い切ったほうが
いいんだ。持つてれば人々に狙われるだろう、それなら、水や塩、

砂糖などで食いつなぐほうが安全だ。独り占めしてしまえば、そのつけがまわるものなんだ。わかったか？ 達也」

邦彦は家族それぞれの皿に牛肉を乗せる（アア、カワイソウナ子供達ヨ、我慢シテオクレ）。

「それはわかるけど、ぼく達家族は人の倍は食べるんだから、飢え死にしちゃうよ」

汗を飛ばして達也が大声をあげる（父サンハ馬鹿ダ！）。紀子は涙が止まらない（アアアア）。

「たしかに我が吉田家の食欲は並大抵じゃない。食欲を取ったら何の取り柄も残らないと言われても、まったく反論できない。でも、大丈夫だ。他の人々に比べて脂肪がたつぷりあるから、ちよつとやそつと食べないぐらいじゃびくともしない。それに人間なんて、水さえ欠かさなきゃけっこう生きれるものだぞ」

邦彦は豚バラ肉を焼きはじめる。

「でも、おなか減るよ」達也は涙声になる。

「我が家は他の家庭に比べて、三倍以上も食べてきたんだから、その分我慢しないといけない。それに腹が減ったら、父さんの分もあげるぞ」

邦彦はさらに鶏の手羽を焼き始める。

「家族の内が一番食べているくせに、何言ってるんだよ」達也が腹だたく声をあげる。

「まあそんなことより、今はたらふく食べようじゃないか、そろそろ匂いをかぎつけて人々が集まってくるだろうしな。まったく因果なものだよな、たった四ヶ月前は平気で食料を捨てていた国民が、今では賞味期限切れの食べ物争い、喜んで食い求めるんだから」

邦彦がさらに野菜を隙間なく載せる。

「父さんは馬鹿だよ」達也が泣きながら肉を食べる。

家の中にチャイムが鳴り響く。

「父さんはな、おまえ達がおいしそうに食べる姿が、なによりも大好きだ。家族が元気に食事する姿ほど幸せなものはない。特に子供達は他人にからかわれるほど食べたが、おまえ達は一度だって、食べ残すことはなかったもんな、それは立派なことだよ……、さて、誰かがやって来たみたいだ。よし、おまえ達、食に関して何倍も誇りを持ってきた我が吉田家らしく、気前よく人々にふるまってあげよう。いやしく見られる体であっても、他人に分け与えることが出来ないほど、いやしい心ではないことを見せよう。食に対して愛着を持ったわたし達らしく、分厚い胸を堂々と張ってもてなそうじゃないか」

もう一度チャイムが鳴る。三人は胸がつまって食べ物を通らない。

「さあ、母さん、お客さんを庭に案内してやってくれ」

その日の夜、底引き網が日本列島を裸にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5128o/>

網

2010年11月3日08時45分発行